

## 母と子で乗り越えた戦中と戦後



京本 良子(きょうもと ながこ)さん(80) 昭和 9 (1934) 年 東淀川区生まれ。父親が 4 歳のときに戦死し、母と弟の 3 人家族に。戦時中は能勢へ疎開し、戦後は家計のために働く母の代わりに遺族会の活動を手伝い、大阪市遺族会婦人部副部長を担当。歌を詠んだり文章を書く特技を生かして、地元の新庄小学校の記念誌などにも寄稿している。現在も生家で暮らしている。

## 葬送の写真



この写真は、昭和 14 (1939) 年の下新庄駅の東側から淡路方面から歩いてきた葬送の行列を撮影したものです。父が中国の広東で亡くなり、大阪の本願寺

津村別院で慰霊祭をして、淡路で電車を降りて菩提寺の覚林寺へ移動しているところです。肉親ですので、列の前のほうに私もいるはずですが、当時4歳でしたので紛れてしまって分かりません。大きな花輪は、本願寺でもらってきたもので、最前列の人が持っている旗は葬送用のもので、まだ自宅に保管してあります。この日、出兵前に勤めていた新京阪が、天神橋駅から淡路まで遺骨を運ぶために特別列車を出してくれたそうです。父はマラリヤにかかり病死でした。痛い思いをしなかつただけ幸せだったのかもしれませんが。物心つく前に離れ離れになり、亡くなってしまいましたので「お父さん」と呼んだ記憶はなくて、いつも話に聞く「わが父」でした。少しよそよそしい感じですね。

下新庄の風景は、今から想像できないような畑が広がっているでしょう？じつは淡路駅の周辺もあまり建物はなくて、パラソルが見えるようなのどかな風景だったようです。

父は亡くなる1年前に兵隊になりました。靖国神社に父が合祀されることになり、小学1年生の私は母に連れられて一緒に行きました。ゴザの上に座るのですが、足が痛くなってしまい、憲兵に頭を押さえられたりもしました。境内の明かりが消え、灯籠に火が灯ると、遠くの方から馬の蹄の音が聞こえてきました。そして前から3頭目の真っ白な馬に乗っておいでのお方様が、昭和天皇陛下でした。12月8日の2か月くらい前でしたから、秋の大祭だったと思います。

33歳で未亡人になった母は、呉服屋さんから仕事をもらって縫い物をしていました。自宅で縫っていましたが、近所の方にもお仕事を手伝ってもらい、工賃を渡していました。また、その合間に軍服も縫っていました。裁縫店のチラシを残しています。ここに「貯蓄豊国は銃後女性の…」って書いてあるでしょう？こんな言葉は、今は使いませんね。国を守って働きましょうという意味です。当時から電車の路線図もほとんど変わっていませんね。城東貨物線も変わっていません。私たちはこれを弾丸列車と呼んでいました。兵隊さんを送っていました。



京本さんの母・光子さんが自宅で仕立物をしていた頃のチラシ。右上には「貯蓄豊国は銃後女性の寸暇を利して！」と書かれている。

## 親元を離れて集団疎開

東能勢へ集団疎開に行ったのは4年生のときです。昭和18(1943)年の秋からでした。出発する前に近くの覚林寺へご挨拶に上がりましたら、「ちゃんと仏さんを拝んでから寝なさいよ」とお数珠をもらいました。

疎開先ではちゃんと食べさせてもらいましたので、食べ物には困りませんでしたが、畑の収穫を手伝いました。周りでは誰もしていなかったけど、繕い物も見よう見まねでやりました。それでも欲しいものはあったので、ほかの子たちがしていたようにハガキに書いて、疎開先から母親へ送りましたら、母は「良子さんとの手紙は綴り方のお勉強ですよ」と諭され、これが基礎になり作文が上手になりました。ある日、雪の間から出ていた水引草を押し花にして母に送りましたら、「仏様にお供えするお花もない大阪ですのに、良子さんはとても優しく育ててくれて、母さんはとても嬉しい」と喜んでくれました。自分にとって、疎開の経験は人間形成のうえで大事な時期だったと考えています。そのときに母からももらったハガキは、私の財産です。



下新庄の実家の母から、疎開先の京本さんの元へ送られてきたハガキ。現在のハガキよりもひと回りほど小さい。

疎開先では、こんな話もありました。正月を迎えるにあたって全員にお餅が配られるのですが、前の晩、ある子どもが布団に入ると、隣の子から足をつねられました。「明日は餅をよこせ」という合図です。先生はそういうことがあるのを知っていますから、「きょうは食事の前にちょっと立って」と全員に言うんですね。仏さまのお側ですから、ちょっと立ってと。そうするとモンペの裾にお餅が隠してあるのが分かるんです。ばれてしまったら、またつねられてしまうんですね。

水商売をしていた母親のことを「親戚のおばちゃん」だと教えられていた子どもが、手紙を通して本当の母親だと知るなんてこともありました。離れ離れになると本当のことを言いやすくなって、人間模様が出るんだな、と子ども心に分かりました。離れることがいいとは思いませんが、私の場合はいい関係でした。

## 淡路の高射砲

父の命日だった3月19日のことです。父のお墓の隣にあった高射砲から撃った弾が米軍機に命中しました。母は運命的なものを感じて、落ちた飛行機を見ようと出かけたようですが、淡路駅の近くでは線路が飴細工のようにひどく曲がっていて、恐怖を感じてすぐ帰ってきたそうです。空襲では水源池をめがけて飛行機が飛んで来たと聞きます。私の家のある下新庄周辺の被害は少なかったのですが、一部に焼夷弾が落ちたところもあったようです。私は疎開していましたので、あとから聞いた話です。

疎開先の能勢の山奥から、家に帰りたくて大阪のほうを見ていました。すると大阪の空は灰色なんです。能勢は青い空なのに、どうしてなんだろうと。でも子どもでしたから、どうして大阪のほうは黒いのか分かりません。空襲でたくさん家が燃えると、決まってそのあと黒い雨が降ったということ、あとから知りました。

## 戦後の下新庄

弾丸列車（城東貨物線）は、最初日本の兵隊が送られました。終戦を迎えると、乗ってきたのは進駐軍で、乗車口からティッシュペーパーやチョコレート撒きながら通り過ぎていきました。近所の子どもたちと喜んで拾いに行くと、「負けた国の者がそんなものを拾うな」と母親に怒られました。戦後に流行った「リンゴの唄」も、家ではろくに歌わせてもらえませんでした。そのへんが、普通の家庭と全然違うところでした。

貨物線では、農業がまた盛んになるにつれて牛や馬が運ばれて、やがてクルマが運ばれるようになりました。今はコンテナが運ばれています。私は疎開の1年を除いて、ずっと生家に住んでいますから、環境の変化そのものが歴史だと分かるんです。

終戦後は親について遺族会を手伝いました。夫が戦死したものと思って家に残された妻が再婚したら、夫が帰ってきたりして、いろいろあったのです。私の家は早くに父が亡くなった分、いろいろな事情が分かっているということで参加しました。母親は働かなくてはなりませんので、その代わりに会合でも「勉強は家に帰ってからやればいから、行っておいで」と言われて。遺族会は70歳までやりました。人間形成の面で育ててもらって、本当の奉仕ということなのかなを知りました。

## 母への思い

戦争中は母が子どもだった私たちを守ってくれましたが、育て方は厳しいものでした。それを受けとめるような気持ちで大きくなりました。母は、子どもの私たちに礼を言って亡くなりました。悲しんでいたら、お寺の住職が「親が親であってくれたことがどんなに幸せなことか」とおっしゃってくれて、ずいぶん励まされました。

終戦後は私も裁縫を教えて生活をしてきました。「縫った糸を始末する」といいますが、始末という言葉には、きれいに片づけることと、ものを大切にするということの2つの意味があるんですね。そんなことを思いついて、私の人生は親に導かれて生きてきたなと思います。

## 若い世代へ伝えたいこと

広東で父が亡くなって、生きて帰った兵隊さんの戦友会の人たちと一緒にその足跡をたどる旅行にも参加しました。聞いているのと行くのは全然違います。聞いていられないような話を聞いたりもしました。そこで感じたのは、過ぎたことを大切にしなければならないということです。そうしないから、こんな世の中になっています。みな、過ぎたことを思い出さないんです。返還前の沖縄にパスポートを使って行きましたが、その頃はひめゆりの塔もまだ整備されていなくて、かわいそうなくらいでした。今は語り部のみなさんががんばっておられます。過去に学ぼうという人がいたからこそ、あのような立派な慰霊塔が建っています。過去をおろそかにしてはいけません。

## <取材メモ>

大正時代に建てられたという生家に暮らしている京本さん。戦災の被害を免れたこともあって、戦中・戦後の手紙や写真、道具などを大事に保管されておられます。当日は、疎開先で母親の光子さんと交わした多くの手紙や、貴重な写真をご紹介いただきながらお話をうかがった。